

令和元年5月25日現在

機関番号：14101
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2016～2018
課題番号：16K02117
研究課題名(和文) スアレスからヒュームまで：スコラの因果論を踏まえたイギリス経験論哲学史の再検討

研究課題名(英文) From Suarez to Hume: the history of British Empiricism re-examined from the viewpoint of the scholastic theory of causation

研究代表者
秋元 ひろと (AKIMOTO, Hiroto)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：80242923
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、ロック、バークリ、ヒュームに代表されるイギリス経験論だけでなくデカルトやマルブランシュといった大陸合理論の哲学者たちの因果論に着目した。そして近世スラ学を代表するスアレスからヒュームに至る因果論の系譜をたどることを通じて、経験論と合理論という二つの立場を横断する思想の流れがあることを明らかにし、イギリス経験論の標準的な哲学史を書き換える必要性と可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

標準的な哲学史記述は、近世の哲学には大陸合理論とイギリス経験論という二つの流れがあり、両者を総合したのがカントだとする。これに対して本研究は、因果論に着目することによって、経験論と合理論という二つの立場を横断する思想の流れがあること、またそれがスコラ学という中世以来の哲学の伝統と連続的であることを明らかにし、従来の哲学史研究を刷新する可能性を示した。

研究成果の概要(英文)：In this research program, I took up not only such philosophers as Locke, Berkeley and Hume, who represent British Empiricism, but also Descartes and Malebranche, who belong to Continental Rationalism, and paid attention to their theory of causation. In particular, I followed the course the theory of causation took from Suarez to Hume, and ascertained the stream of thought which runs across empiricism and rationalism, thereby showed that it is both necessary and possible to rewrite the history of British Empiricism.

研究分野：西洋近世哲学

キーワード：スアレス デカルト マルブランシュ バークリ ヒューム 因果論 スコラ学

1. 研究開始当初の背景

イギリス経験論をロック、バークリ、ヒュームというトリオの仕事と見なす哲学史記述は、ヒュームの懐疑主義に対して常識の立場を擁護したトマス・リード以来のものであり教科書レヴェルではいまだに一般的である。その一方で、そうした記述の見直しの試みも Loeb 1981 以来為されている。そうした新たな研究動向の一つの特徴として、近世哲学のとくに因果論に着目し、それとスコラの因果論との関係という観点から、デカルトやマルブランシュなどの大陸の哲学者たちも含めた近世哲学全体の見直しを図るという流れがある。この分野の仕事としては、Clatterbaugh 1999, Ott 2009 などを挙げるができる。

スコラの因果論の標準的見解は、トマスやスアレスが支持した「協働論 concurrentism」と呼ばれ立場であり、それによれば、第一原因である神と第二原因である被造物が協働して結果を産出する。つまりスコラの因果論は、神を第一原因とすることで、基本的には、原因として結果を産出する力を神の意志に集約する方向(トップ・ダウンの見方)をとりつつも、被造物もまた第二原因としてではあるが結果の産出に一定の寄与をすることを認めた(ボトム・アップの見方)のである。

近世に目を向ければ、「機会因論 occasionalism」(原因として働いて結果を産出する力をもつのは神のみである)を唱えたマルブランシュは、スコラの因果論のトップ・ダウンの見方を突き詰めたと見ることができる。これに対してボトム・アップの見方に徹したのがロックである。というも彼は、伝統的な実体概念の解体を試みつつも、実体概念それ自体は維持して、自然学を各種の実体のそれぞれに固有の本質の探究と規定した。そして原因が結果を生み出す力も、被造物である実体の本質規定にかかわる事柄として扱ったからである。

以上のような見取り図を踏まえて、本研究は、とくに近世スコラ学を代表するスアレスの因果論からヒュームの因果論に至る系譜をたどることを通じて、イギリス経験論哲学史を再検討する必要があるとの考えに立って構想された。

<文献>

Clatterbaugh, Kenneth. 1999. *The Causation Debate in Modern Philosophy, 1637-1739*.

Loeb, Louis. 1981. *From Descartes to Hume: Continental Metaphysics and the Development of Modern Philosophy*.

Ott, Walter. 2009. *Causation and Laws of Nature in Early Modern Philosophy*.

2. 研究の目的

ロックによってはじめて自覚的に提唱された経験論は、バークリを経てヒュームへと受け継がれていく過程を通じて次第に徹底されていった。標準的な哲学史は、イギリス経験論の歴史をこのように教えている。これに対して本研究は、イギリス経験論だけでなくデカルトやマルブランシュといった大陸合理論の哲学者たちの因果論に着目し、近世スコラ学を代表するスアレスの因果論からヒュームの因果論に至る系譜をたどることを通じて、イギリス経験論の標準的な哲学史を書き換える可能性を示すことを目的とした。

ロックとヒュームについては、すでに研究代表者による一定の研究成果がある(秋元 2015, 秋元 2016)。そこでこれまでの研究の不十分な点を補うという観点を取り、具体的には、以下の3点の解明を目指した。

(1) スコラ(スアレス)の因果論の解明

これは、スコラの因果論の伝統を踏まえてイギリス経験論の哲学史を再検討するという本研究の目的達成のための基礎固めとして不可欠である。スコラの因果論のなかでもとくに近世スコラ学を代表するスアレスを取り上げたのは、彼がデカルトをはじめとする近世の哲学者たちの思索に大きな影響を与えたからである。

(2) デカルトの因果論の解明

これは、スアレスからマルブランシュに至る道のりの間隙を埋めるという意味をもつ。

(3) マルブランシュとバークリの因果論の解明

これは、マルブランシュからヒュームに至る道のりの間隙を埋めるという意味をもつ。

<文献>

秋元ひろと 2015, 「ヒュームの因果論—知識論と形而上学の「大変革」—」, 『三重大学教育学部研究紀要』第66巻, pp. 29-38.

秋元ひろと 2016, 「実体と因果関係—アリストテレス主義の継承者ロックと批判者ヒューム—」, 『三重大学教育学部研究紀要』第67巻, pp. 49-60.

3. 研究の方法

上記(1)(2)(3)の解明の作業を、それぞれ平成28年度、平成29年度、平成30年度に実施する

という仕方で行った。

(1) 平成 28 年度

スアレスの『形而上学討論集』の因果論を扱った部分、すなわち討論 12 から 17 のうち、とくに作用因一般を主題とする討論 17 から 19、作用因のうちでも神の三作用（創造・保存・協働）を主題とする討論 20 から 22 の読解作業を通じて、スコラ（スアレス）の因果論の特徴を明らかにした。

参考文献としては、スアレスの因果論を解説している Freddoso 2002, Fink 2015 などを利用した。

(2) 平成 29 年度

デカルトの『省察』ならびに『哲学原理』の関連箇所、とくにスコラの因果論の伝統に属する「連続創造説」が登場する『省察』の第 3 省察、『哲学原理』の第 1 部の読解作業を通じて、デカルトの因果論の特徴を明らかにした。

参考文献としては、デカルトの因果論を扱っている Des Chene 1996, Schmaltz 2008 などを利用した。

(3) 平成 30 年度

バークリの『人知原理論』ならびに『運動論』の読解作業を、とくにマルブランシュの因果論との比較という観点から進めることを通じて、バークリの因果論の特徴を明らかにした。

参考文献としては、バークリとマルブランシュの関係を論じている Luce 1934, McCracken 1983 などを利用した。

< 文献 >

Des Chene, Dennis.1996. *Physiologia: Natural Philosophy in Late Aristotelianism and Cartesian Thought*.

Fink, J.L. 2015. *Suarez on Aristotelian Causality*.

Freddoso, Alfred J. 2002. "Suarez on Metaphysical Inquiry, Efficient Causality, and Divine Action"

Luce, A.A. 1934. *Berkeley and Malebranche*.

McCracken, C.J. 1983. *Malebranche and British Philosophy*.

Schmaltz, T.M.2008. *Descartes on Causation*.

4 . 研究成果

(1) スコラの因果論

スコラの因果論の標準見解である「協働論」によれば、被造物世界に生じる結果は、普遍的な第一原因である神が特殊的な第二原因である被造物と協働することによって生じる。このとき第一原因の働きと第二原因の働きは、同じ一つの結果を生じさせる働きであるという意味で、同じ一つの能動の働きである。その働きは、第一原因との関係で見れば、どのような種類のものでもあれ結果（無ではなくて存在）を生じさせる働きであって普遍的であるのに対して、第二原因との関係で見れば、ある特定の種類の結果を生じさせる（存在を限定する）働きであって特殊である。あるいは結果が有する存在は、第一原因との関係で見れば存在そのものであるのに対して、第二原因との関係で見れば限定された存在である。

これはトマスをはじめとするスコラ学者が、イスラームの神学者が唱えた「機会因論」に対抗して打ち出した見解であった。機会因論は、被造物が原因として働く可能性、したがって神と被造物の協働の可能性を否定し、被造物世界に生じる結果の真の原因は、第一原因の神のみであるとした。これに対してスコラの協働論は、被造物が第二原因としてではあれ真の原因として働くことを認めたのである。

スコラ学が目指したのは、キリスト教とアリストテレス主義の統合であった。そしてこうした基本性格は、スコラの因果論である協働論にも反映されている。すなわち、スコラ学者は、アリストテレスの因果論を被造物に原因として働く力を認めるものと解釈して、それを、神を頂点とするキリスト教の枠組みに取り込んで位置づけようとしたのである。スコラの協働論には、神を第一原因とすることで、基本的には、原因として結果を産出する力を神の意志に集約する方向（トップ・ダウンの見方）をとりつつも、被造物もまた第二原因としてではあるが結果の産出に一定の寄与をすることを認める（ボトム・アップの見方）という二面性があるともいえるだろう。

これに対して機会因論は、協働論からアリストテレス主義がもつボトム・アップの見方を切り離して、トップ・ダウンの見方を徹底しようとする立場であるから、アリストテレス主義者であったスコラ学者には受け入れられなかった。しかし機会因論は、スコラのアリストテレス主義を批判した近世の哲学者たちのなかに、マルブランシュらの支持者を見出していくことになるのである。

ところで協働論にとっても、被造物はあくまでも「第二」原因であり、無条件に原因といえるのは「第一」原因の神のみである。とすれば、「無条件に」原因といえるのは神のみであるとする協働論から、「真の」原因といえるのは神のみであるとする機会因論までの距離は意外に近いことになる。つまり協働論は、近世の機会因論の復活に向かう動きを胚胎していたともいえるのである。

(2) デカルトの因果論

スコラのアリストテレス主義を批判した近世の哲学者のなかには、ホッブズのように、神を哲学の主題から排除することによってそうした者もいる。もっともホッブズも、実体と偶有性という概念枠組みでもって存在者を捉えるなど、アリストテレス主義と完全に絶縁したわけではない。しかし、哲学においては神の話はしないということになれば、神を第一原因とすることを基本とするスコラの因果論はその土台から一挙に解体されてしまうことになる。しかし、デカルトの対応は違っていた。神はデカルト形而上学において不可欠の役割を果たすし、因果論においてもデカルトはスコラの遺産を引き継いでいる。しかし、もちろん、デカルトの因果論はスコラのそれと同じというわけではない。

デカルトは、普遍的な第一原因と特殊的な第二原因を区別する点でも、また普遍的な第一原因を神とする点でも、スコラの伝統に従っている。しかし、スコラの因果論が被造物を特殊的第二原因としたのとは異なり、彼が特殊的な第二原因とするのは、被造物ではなく自然法則である。

普遍的な第一原因	神	普遍的な第一原因
		法則	特殊的な第二原因
特殊的な第二原因	被造物		

スコラとデカルトの見解を比較すると、特殊的な第二「原因」の位置が被造物から法則に移動していることが分かる。比喩的にいえば、神と被造物のあいだに位置する因果論の重心が神の側に向かって移動しているのである。

こうした重心移動の背景にあるのは、被造物世界を規定する存在論の変化である。第二原因が「特殊的」であるのは、それが被造物世界の特殊性を反映するものだからである。その特殊性は、アリストテレス主義者によれば、各種の実体に固有な本性に応じた特殊性である。そしてその本性の違いを説明する役割を果たしたのが、質料・形相説を基本とする存在論である。一方、質料・形相説に代えてデカルトが採用したのは、物質的実体を延長と同一視する存在論である。そこでは、物質的実体は延長する事物として一括され、各種の実体に固有な本性に基づく違いという意味での、実体間の違いは問われなくなる。そのため法則が反映する特殊性も、各種の実体に固有な本性に応じた特殊性ではなく、延長する事物として一括された物体の運動の多様性に応じた特殊性となる。こうしてデカルトの因果論においては、それが考慮すべき被造物世界の特殊性は、スコラの因果論に比べて単純化され、その分だけ被造物の側に要請される因果性の寄与がいわば軽減されているのである。

これがさきに指摘した因果論の重心移動の実態である。スコラの協働論は、機会因論とは違って、真の原因といえるのは神のみであるとせず、被造物にも原因としての地位を認める。しかし、協働論も無条件に原因といえるのは神のみであるとするのであるから、そうした立場においては、因果論の重心はもともと神の側にかなり偏っていた。デカルトにおいては、その重心が、さらに神の側に向かって移動している。さきに述べたように、スコラの協働論は、近世の機会因論の復活に向かう動きを胚胎していた。デカルトは、存在論のいわば軽量化によって、その動きをさらに一步押し進めているのである。

(3) マルブランシュとパークリの因果論

マルブランシュは、近世の機会因論を代表する哲学者であり、真の原因といえるのは神のみであると主張した。マルブランシュの機械因論は、スコラの標準見解である協働論をベースとして、それに、やはりスコラの標準見解の一つである連像創造説と、近世自然学に特徴的な機械論とが加わって導き出されたものと見ることができる。

物体の衝突に即していえば、こういうことである。

スコラの協働論によれば、第一原因の能動の働きと、第二原因のそれとは同一の結果を生じさせる同じ一つの働きである。しかし、その働きは、第一原因との関係で見れば、どのような種類のものでもあれ結果（無ではなく存在）を生じさせる働きであるが、第二原因との関係で見れば、ある特定の種類の結果を生じさせる（存在を限定する）働きであるとして概念的に区別されるのであった。ところが機械論的観点に立てば、第二原因である物体の衝突の結果は、衝突後の物体の運動（運動状態とその変化）の一種類に限られる。そして連続創造説により、物体の運動は、その変化も含めて第一原因である神による連続創造の働きの結果であるということになれば、創造の働き（無ではなく存在を生じさせる働き）とは区別された、ある特定の種類の結果を生じさせる働き（存在を限定する働き）について語る余地はほとんどなくなる。あえて存在の限定という要素を取り出せば、それは物体が創造される時間と場所であるが、それもまた時間の経過とともに物体をそれが位置する場所につきつぎつぎに創造する神の連続創造の働きの結果なのだからである。こうして第二原因である物体の衝突は、物体をつぎの時間と場所に出る神の連続創造の働きに入力されるいわば初期条件として、かろうじて機会因としての地位を保持することになるのである。協働論が第二原因に認めていた「存在を限定する働き」が極小化されたもの、それが機械因だといってもよいだろう。

パークリは、つぎのような独特の形而上学で知られる哲学者である。それによれば、存在者

として認められるのは観念を知覚する事物である精神と、精神によって知覚される事物である観念の二種類のみである。これは実体としては精神的実体のみを認め、物質的実体は認めないということである。それゆえこの形而上学は「非物質論」と呼ばれる。そして因果論について言えば、バークリは、精神のみが原因であり、観念は原因ではあり得ないとする。これは彼の非物質論とつぎの二つの特徴づけから、すなわち精神は能動的な存在者であるのに対して、観念は非能動的な存在者であるという精神と観念の特徴づけと、能動性をもつものという原因の特徴づけとから帰結する。その意味で、バークリの因果論は非物質論の系として位置づけられるものなのである。

バークリは、非物質論をとる以上、そもそも物体の存在を認めない。しかし通常「物体」と呼ばれるもの、つまり、彼が観念の組合せとして捉え直す、いわゆる物体を原因とは認めず、それが原因と見なされる場合に実際に原因として働いているのは神だとする点で、自分はマルブランシュらの機会因論者と類似の見解をもっていると認めている。しかし、こうした類似点に限ってみても、マルブランシュとバークリとのあいだには大きな相違がある。マルブランシュは、スコラの因果論とりわけ協働論と直に向き合い、その含意を突き詰めれば、それが機会因論に帰着することを示すという仕方でも因果論を展開する。それに対してバークリは、因果論を、非物質論という彼独自の形而上学の系としてそれを導き出すという仕方でも展開する。バークリも、たしかにスコラの因果論を念頭に置いて論述を進めてはいる。しかし、マルブランシュがスコラの因果論に丁寧に応接しているのに比べて、バークリにはそうした姿勢はあまり見られない。彼の因果論は、非物質論を前提とすれば、そこからその系として導き出されるものであり、そうである以上、スコラの因果論と正面から向き合う必要はなかったのである。マルブランシュは、スコラの因果論から出発して、それをいわば内部から掘り崩すという仕方でも因果論を展開した。それに対してバークリは、彼独自の非物質論を中核とする形而上学から出発して、スコラの因果論はいわば跳び越すような仕方でも因果論を展開したといってもよいだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

秋元ひろと

マルブランシュとバークリ—因果性の形而上学への二つの異なるアプローチ—

三重大学教育学部研究紀要, 第70巻, 2019, 87-116. 査読なし

秋元ひろと

特殊的な第二原因としての法則—スコラの因果論とデカルト自然学—

三重大学教育学部研究紀要, 第69巻, 2018, 65-89. 査読なし

秋元ひろと

ホッブズの形而上学—彼の自然学のまえに置かれ、あとに完成される学問—

三重大学教育学部研究紀要, 第68巻, 2017, 21-38. 査読なし

〔学会発表〕(計1件)

秋元ひろと

ホッブズ『リヴァイアサン』の読み方

三重哲学会, 2016年7月9日, 三重大学(津市)

6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。